

大学婦人協会東京支部

1999.3
第25号

- ・IFUWグラーツ総会に出席して (1P)
- ・漫歩くらぶの歩み (5P)
- ・声のひろば (6P)

CIRとして IFUW総会に出席して

国際第一委員長 平野和子

一九九八年八月十九日、グラーツのコンGRESS・センターでIFUW評議会が始まり、ボスキット会長の美しい英語が響いてきた。CIRとして一人で賛否の意思表示をしななければならず、苦手の聞き取りを心配していたが、意識的と思われるゆっくりとした口調に少し安心する。時々議論が白熱し早口になったり、ナマリ強い英語が飛び出すと、不安が再燃する。それでもどうか、この日の務めを無事に終えた。

会議を通じて、開会式の基調演説など原稿が用意されている場合はかなり聞き取れたが、込み入った討論や小人数に分かれての討論となるとお手上げ。それに集中力の持続が難しい。鉛筆を落として拾ったり、疲れて少しでも注意力をそがれると、フォローできなくなる。JA UWから大勢が参加し、発言しなければいけないようなプレッシャーを感じて落ち着かない。しかし、初体験の身にとって、日常使わない言葉で、二三分間に意見を述べるのは無理だった。それにつけても感心したのはアフ

リカの女性達のパワーと表情豊かなスピーチだった。副会長の立候補演説、学際会議の論文発表、開発援助プログラムの報告、どんな場合も、喜びや感謝、希望、意欲を力強く訴える姿勢が伝わってくる。英語の巧拙を超越し、細かいことは聞き取れなくても、心に訴える力があつた。

もう一つ痛感したのは、議題や案を自分の問題として、どう思うかをしっかり考えること、そして主張すべきは主張し、妥協点を探りながら、合意に結びつけるという健全な議論を進めることの重要性である。アメリカの協会の会費支払い問題で、評議会の時かなりきつい言葉で批判したある代表が、最後に妥協案に合意して、当初の非礼を謝罪した。批判するだけでなく、建設的な案を考え、それが各国の取り組みと妥協を促したことを知っていたので、その清々しい態度に一瞬、胸が熱くなる思いがしたほどだった。

代議員は忙しく、緊張の連続である。四十項目近い定款や付則の改訂のつど、賛否の札を掲げる。これに二十四件の決議案の採決も加わる。手際よい議事進行に息つく間もないほどである。さらに会議の合間に副会長四人と財務理事一人の選挙をす

るのも、重要な務めである。最初に過半数を得票できず、副会長四人がいずれも決選投票に落ちこまれたので、それだけで八回の投票になる。幸い、青木元会長が決選投票で第一副会長に当選し、代議員として責任を果たすことができた。CIRはこのほか、委員の選挙も行なう。

忙しい日程の中で、心ななむ一時もあつた。オーストリアのタペや旧王宮でのフェアウェル・パーティーのほか、近くの教会で特別に催されたミサに参加する機会も与えられた。代議員として一緒に行動する時間が多く、精神的なゆとりもなかったため、外国の会員と交流するチャンスが少なかったが、スタンフォードや横浜で知り合った会員との再会は、嬉しい一時だった。

スタンフォード総会に初参加して、議事や採決の過程に興味を覚えたことが、IFUWとの関わりを深める動機となった。今回も大勢の会員が当時の私と同じ感動を覚えたことだろう。次のオタワ総会には、一人でも多くの会員が積極的に会議に参加されることをお勧めしたい。

(CIR = Coordinator of International Relationship)

'98セミナー報告 (98・9・19、20)

副支部長 待場田鶴子

一九九八年度全国セミナーは、残暑の厳しい二日間、会員一七四名、来賓六名、講演者一名、シンポジスト一名、一般参加者十三名で、第一生命東戸塚教育センターにて開催された。

向こう三年間のテーマは『女性のエンパワーメント』男女共同参画社会の確立をめざして』である。文部省来賓の挨拶に続き、支部と委員会

による九つの研究発表。午後は東京大学教授で男女共同参画審議会委員である大澤真理氏の講演。その後「女性の権利—現況と課題—」のシンポジウム。



三人の支部会員と奈良女子大学教授木村陽子氏による身近な問題を取りあげての討論。

次にIFUW第一副会長になられた青木怜子氏と、JAUW

団長の中村ミチ氏によるIFUWグレート国際会議の話。最後に国際第一委員長平野和子氏の、スライドを交えた明快なグレート国際会議報告で一日目を終了。

二日目は、午前中の分科会に続き、午後その報告と全体討議。全国セミナーは無事終了した。

なお今回は、会場が東戸塚ということで、神奈川支部と東京支部が協力して実行委員の任に当たった。

初めてセミナーに参加して

東京支部の委員を引き受けてから半年足らずで、このセミナーに参加しました。セミナーの主旨や目的を十分に理解していない時点での参加でしたが、何もかもが目新しく、大きな刺激になりました。

会場は駅から近く、近代的で素晴らしい建物で、食事も美味しく、全体的に和やかな雰囲気でした。日頃の内びりした主婦の生活に甘んじている私達にとって、お会いする皆様の力強さや積極性、発表や質問をする会員の方々の問題意識の高さや探究心に、大いに感服しました。家庭内における夫の暴力、子供や老人への暴力、年金や社会保障、障害者に対する社会福祉など、現代社会の

抱えているあらゆる問題が提出され、少しショックな面もありました。

二日目の分科会が二時間では短く、もう少し問題をほり下げる時間がほしかったような気がします。また、せっかく素晴らしい内容のセミナーなので、新聞や戸塚駅周辺の掲示板などに広告を出したりして、より多くの一般の人々や学生達の参加が得られれば、もっと成果が得られたと思います。

(岩田・小池)

講演 (98・10・28)

「東洋の陰陽判断による食事法および健康法」

講師 小橋規實男氏

快晴の午後、青山のウイメンズプラザで、小橋規実男氏の右記テーマによる講演会が開かれた。

氏は「万物は全て陰と陽に分けられていてその調和により成り立っている。食物においてもそれは同様であり、摂取の際、陰と陽の組み合わせの中庸を心掛ける事こそが健康な身体を育成し、それによって健全で忍耐力ある精神を養うものである。お米を主食とし、塩、味噌などによる日本古来からの料理法の優秀さを見なおし、食の乱れを正す事が、心身を潤沢にし世の中を明るく未来へ

導くにちがいない」と力説された。

さて、夕食は少しばかり腕を振るわねばと考えながら、十月も終りの香るばかりに美しい夕暮の帰路を急ぐのであった。

(時枝玲子)

「気象と試験機器」(98・9・9)

—スガウエザリング見学記—

「今度の見学会は、世界で初めて本物の雪を降らせた会社」といって、子供のようにはしゃいで参加した。

始めに会長のお話を伺った。創立大正九年。老化試験機、色彩計などの必要性。試験機のレベルは、各国のレベルのパロメーターになるほど重要なものだという。

次に屋上に出て、太陽追跡集光暴露装置など種々の暴露台を見学した。その後階下に降り、材料の老化度合を短時間で計測する試験機や色彩計などを見学。色彩計の前では、色を正確に計測して正確に伝える必要性を、私たちの生活を取りまく全ての環境と結びつけて説明してくださった。

最後に待望の、降雪試験装置による「本物の雪」に直面。雪がでるメカニズムを伺って美しい六花の結晶の雪にあらためて感激した。

(松浦照世)

講演 (98・12・9)

「教科書にみる日本の平和教育」

講師 田中正子氏



昨年夏、グ
ラーツ国際会
議でスピーチ
された田中正
子氏をお迎え
して、事務所
会議室で講演会を開催した。参加者は
二十三名。

「教科書にみる日本の平和教育」を
テーマに、田中氏をはじめとするJ
AUW教育委員会の方々が、三三四
冊にも上る小・中・高校の教科書を
調査された結果を報告された。

この調査は、一九九六年、日本を
交えた五ヶ国の婦人協会又は連盟が
自国の初等・中等教育における平和
教育の実情調査をするために、IF
UW、JAUW平和研究奨学金を授
与されたのを受けたもので、そもそ
もの発端は、一九九二年の湾岸戦争
勃発の際、国際大学婦人協会が何か
できることはないかという提案がな
された時、日本の大学婦人協会が会
員からの募金によって創設したJAU
W平和研究奨学金が基金となつて
いるとうかがい、とても意義深く感

じられた。調査のポイントを

(1)過去の戦争と植民地支配 (2)原爆
投下 (3)憲法の平和主義(第九条と
自衛隊) (4)国際協力、人権

に置いて、教科書にどのように記述
されているかを、歴史の変遷及び外
国の教科書との比較も交えて、レジ
ュメに添って解り易く説明された。
検定制度にも紆余曲折があったが、
一九七〇年を境に、教科書の内容も
かなり変化してきて、事実をなすべ
く忠実に記載する方向にきていると
のこと。

講演後の質疑応答も活発で熱がこ
もり、平和教育に対する関心の高さ
がうかがえた。最後に田中氏が「教
育で戦争を抑止する努力をする必要
性を感じる」と締めくくられた。こ
れが実るかどうかは我々一人一人の
意識にかかると大なので、「今、私
に何ができるのか」という課題を抱
えながら家路を辿った。

なお、この調査結果は「日本にお
ける平和教育」という素晴らしい冊
子にまとめられ、大学婦人協会より
発行されているので一読の程。

(河井尚子)



財務主催 (98・11・16)

筑波農林研究団地の研修・見学

― 遺伝子の組み換えとは ―

気持ちよく晴れ渡った秋空の東京
駅前を九時に出発。途中渋滞もなく
筑波事務所へ約東通り十時三〇分
着。乗用車で参加された茨城支部の
吉田支部長はじめなつかしいお顔ぶ
れの方々七名と合流し総勢四十二名
のグループは、食事時の四十五分間
以外はすべて研修・見学で久しぶり
に学生時代に戻ったようだった。往
きのバスの中で遺伝子組み換えにつ
いて少し説明してほしいと言われ私
では役不足と承知しながらも、一九
五三年に明らかになった今世紀最大
の発見ともいえる遺伝子本体である
物質、すなわち生命現象の基本物質



であるDNA

(デオキシリ
ボ核酸)の構
造とその役割
について簡単
に説明した。

筑波では午
前中一杯、遺
伝子組み換え
技術などのく
わしい説明を

受け、参加者からも活発な質問が出
た。昼食は研究所内の食堂で熱いお
味噌汁までついた美味しいお弁当で
一息ついた。午後からはホテルの遺
伝子を導入した光るタバコの葉の写
真、病気に強い野菜、光合成遺伝子
を導入した組み換えイネ、アルコー
ル中で抽出した鮭のDNAの白いか
たまりなどを見、また野菜成分の生
理機能から健康への影響といったお
話もきいて、最後は双子のクロロ
ン牛を間近に見ることができた。

しかし私達は、このように遺伝子
を取り出しそれを自然界ではおこら
ない形で異種生物に移植することに
危機をおぼえ、沢山の疑問が湧き出
る。DNAにタンパク質の作り方の
情報が記されているというが誰がそ
れを記入したのか、人間を遙かに超
えた絶体の存在を感じないわけには
いかない。また脳が遺伝子によって
作られたとしてもそこに働く心が遺
伝情報の次元をこえて個体を支配で
きるなら、心はすでに遺伝子を超え
た存在になっている。恵み深く我々
を守ってくれた自然が、遺伝子
の解明によってどう変化してゆく
のか、これからの研究者の活動を祈
るような思いで見守ってゆきたい。

(文と写真・野崎方子)

サークルから

○英語講座

第一第三金曜日十時～十二時
大久保地域センター 初級程度の
英語力 会費一万円(十回分)

講師は松本節也元法政大学教授
'99年度教材 Christopher Hibbert,
"London: The Biography of a
City", Penguin Books, 1977

右記「ロンドン…ある都市の歴史」
から興味深い箇所を選んでプリント
したものを読む。詳しい注釈がつき
理解しやすい。

○特別企画

① 英国ツアーへのお誘い。

現在使用中の教材「Great
Britons」に出てくる歴史的人物に関
わりのある土地や、「ロンドン…ある
都市の歴史」中の興味深い場所や、
その他英国の文化や芸術を实地に見
学する英国ツアーを行います。案内
役は講師。

② 学習外に、講師の研究分野の十
八世紀英文学から、わが国で最も知
られ、読まれている作品『ガリバー
旅行記』と『ロビンソン・クルーソ
ー』を取り上げ、講師が作家と作品
を面白く語る企画もあります。
申し込み、問い合わせ・峯川正子

☎ FAXとも、(〇三―三六八四―八三〇七)

○東京漫歩くらぶ

問い合わせ先・峯川正子 (☎〇三―
三六八四―八三〇七)

○楽しい俳句会近詠 (アイウエオ順)

年明くる銀杏の梢の向かふより

昭子

庭主の蝦蟇と語れり雲のこと

栄美子

梅の木に絵馬をかけらるるベレー帽

恭子

暮れてなほ人声高し木の芽どき

邦子

万緑を求め芭蕉と地図の旅

田鶴子

風走るミシガン大湖夕薄暮

淑乃

大都市のほてり鎮めて月高し

朋子

木曾谷や寸光享けし紅茸

夏子

デイスカバリーの美しき着陸冬霞

典子

子へ苞のカフカ肖像チェコの秋

英子

みはるかす花野の涯や湖の青

文子

名利や名の婀娜めける花菖蒲

瑞穂

ねころびてアロマテラピー大花野

洋子

行く秋や背丈揃はぬ六地藏

岩田玲子

薄ら日の玻璃にたゆたふ書架の春

時枝玲子

ハンカチのピカソの女四つだたみ

講師・富子

若干のゆとりがあります。

問い合わせ先・海老原典子 (☎〇三―
一三五―一五〇五六)

源氏物語を読む会

間もなく「須磨の巻」に入ろうと
しています。

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会

源氏物語を読む会



クリスマスリースを作りました。

おめでとうございます

平成九年の支部総会で記念講
演をしてくださったベアテ・シ
ロタ・ゴードンさんが、去年の
秋の叙勲で、勲四等瑞宝章を受
けられました。

『東京漫歩くらぶ』の歩み

峯川 正子

『漫歩くらぶ』といってもご存知でない方も多いと思う。東京支部のサークルの一つとはいえ、もともと私の興味から始めた非常に私的な感じの集まりで、東京都内や近郊をぶらぶら散策しようというものである。

①朝倉彫塑館―谷中霊園―上野

きっかけは、私の小学校同期会の会報へ寄せられた「谷中・上野から」という随筆を読み、「これは実際に歩いてみないと判らない」と感じてここからだった。早速同期の友人の協力を得て親しい方達に声をかけ、平成四年十月十名くらいの方々が日暮里駅に集まった。途中昼はおそば屋をみつけて腹を満たし、疲れれば和菓子屋の店先でお薄を一服といった具合に、朝倉彫塑館をふり出しに戦前の町並を偲ばせる細工物の店をひやかしたり、古い街道の風情を残す道筋で思いがけない看板を見つけたりと、谷中の墓地进行を抜けて上野博物館前まで気儘な散歩を楽しんだ。

②佃島ともんじや焼き

その年の十二月、二回目を企画した。当時旧佃の町に新しい高層ビル

第16回下目黒界隈 雅叙園にて



が建ち始めその対照に興味があったし、また隣の月島ではもんじや焼き屋が軒を連ね、灯ともし頃には若者達が列をなすのも面白いと思った。私宅の近くの佃中学の校長先生にお願いし、当日は佃中学を見学。有名な住吉神社のお祭りのビデオの説明を受け、特別におみこしも拝観。

佃煮屋さんで土産も買い、いよいよもんじや焼き屋さんへ、しもた屋風のせまい二階でのご一同は大満悦だった。

③千駄木―根津神社―上野不忍池
いつの間にかやたら東京支部のサークルとなりいささか責任を感じる。

当時、故山川正子先生の古典講座が森鷗外の観潮楼跡の記念館の近くであった関係で、記念館から静かな裏通りを抜けて根津神社へを企画。途中の弥生町では、ここで発見された土器に弥生土器の名が付きその時代も弥生時代と名づけられたと勉強する。

根津から不忍池に出る道の途中には、サトウハチロー記念館や竹久夢二、落谷虹児など昭和初期の挿絵画家の作品を展示している美術館もあり昔を懐かしむ。

④樋口一葉記念館と西の市
ご要望により西の市で賑わう大鷲神社を取り上げ、近くの一葉記念館とセットにする。

- ⑤江戸東京博物館と八百膳昼食
- ⑥王子界隈↓旧古河庭園と洋館
- ⑦柴又帝釈天↓水戸徳川家別邸
- ⑧日本近代文学館↓日本民芸館
- ⑨隅田川・荒川クルージング
- ⑩小石川後樂園↓無量山伝通院

- ⑪高尾山↓薬王院精進料理
- ⑫早稲田大学演劇博物館
- ⑬三光院↓江戸東京たてもの園
- ⑭愛宕山放送博物館↑増上寺
- ⑮自然教育園↓庭園美術館
- ⑯雅叙園↓五百羅漢寺↓目黒不動
- ⑰元禄市(旧吉良邸周辺)↓泉岳寺

と、昨年十二月に十七回目を終わり一息ついたところである。
こういう企画はお天気次第。現地集合、半日行程で原則として徒歩となると天に祈るしかない。幸い寛容な皆様は雨天でも半日楽しんでくださる。この寛容さと、下見に同行したりお知恵を借して下さる方々のご協力がこのサークルを支えているのはいうまでもあるまい。



「声のひろば」

「最近の結婚事情」

友人知人から写真釣書が送られてきます。筆跡は母親、果して本人に結婚する気があるのかしら。都会の自宅から通勤している娘さん、住居費、食費、母親はお手伝いさん代り。平安時代のように彼が通ってくるわけなし、家庭でぬくぬくして結婚なんてとてもとても。母親は早く孫の顔が見たいだけ。三十の声をきき、やっとお見合、三高の彼を射とめて結婚。子供ができ、子育てと仕事の両立は無理、母親に助けて貰うために彼とともに実家へ。彼としては面白くない、何となく二人の間に溝ができ、離婚。子供は私が育てます、養育費請求、子供には会わないで、母親は娘と孫に囲まれてにこにこ。彼もまた実家に戻り、仕事が増えたと親に愚痴をこぼされても、もう結婚なんてこりこり。かくして実の親の面倒は実の娘がみ、また実の息子が親の面倒をみるはめに。こういうことって段々増えてくるのではないのでしょうか。

(田 律 子)

「トンネルの中」

今、私は突発性難聴という病気に罹っている。左右交互に、これで三度目である。突然に聴力が落ちる病気が原因はわかっていない。主にステロイドを使った治療をしたが、一度目、二度目と罹患を重ねることに聴力が落ちていく。そしてそれに反比例するように耳鳴り、頭鳴などの雑音が大きくなっていく。頭の中で色々な音がまるで祭りのように鳴り、反響している。このような状態で、これからどのように社会と係わって生活していったらよいのだろうか。そういう思いの中で浮かんてくる光景がある。

九月のセミナーに参加した。その時、私は視覚障害を持つ三村さんをヘルプする役目をいただいた。個人的に話をした時、私が彼女のスピーチに触れ、不躰に「人は七割を視覚から情報を得ている。とすれば、あなたはその七割を得ていないことになり、その中で素晴らしい学業成果を修めるといふのはどういうことか」と。彼女は「確かに情報は不足するけれど、情報の量だけの問題ではない。その人の感性が物をいう」と。人は置かれた状況の中でどう生き

ていくかである。それしかない。どこかで読んだこんな言葉も思い出す。「人は大切な物を失わなければ大切な物を得られない」なんと厳しいことか。

(酒井 敏子)

「よく生き・よく生き」

去年亡くなられた淀川長治氏は、八十九歳まで映画一筋に生きてきたひとで、亡くなる前日まで映画解説の仕事をし、映画を愛した素晴らしい生き方だったと思います。

私も今年は古稀を迎えます。素晴らしい友人達に恵まれた悔いのない人生が送れたと、自分を誉めてやりたいと思うこの頃です。しかしこれからの人生の終わり方、その過程を考えると、自然体でいこうと思いつつ、具体性にかけてしまいます。「よく生き・よく死ぬ」の実現が最も大切だと考えています。

「葬儀の生前契約」それに伴う、よく生きるためのアドバイス、サポートが、私の今後の人生を安定した楽しいものに、してくれることでしよう。

皆様もぜひ「葬儀の生前契約」にご入会頂いて、一緒に豊かに何の憂いもない老後を、皆様と共に迎え

たいと思います。

(田嶋 初美)

「忘れ得ぬ人」

去る十一月、カウンセラー仲間達とスイスのキュースナハツにある「ユング心理学研究所」での研修旅行に出かけた時のことである。一行の中に、Y市大の大病院の内科の先生が居られた。まだ日本では少ない緩和医療にたずさわっていらつしやるとのことで、いろいろな意味でご苦労が多いだろうということが容易に想像できた。私は魂が肉体を離れて行くその瞬間を大切にしたいと思っています。その言葉を聞いた時、その先生の、人間に対する愛情と人生に対する姿勢そのものが見えたように感じられた。女性特有の感性と優しさから出た言葉だったのかも知れない。とにかく今の医療に欠けているものがそこにはあった。まだ三十代の若さで人間の一番大事にしたいものをしっかりと見つめて、日々病院で死に直面した人々と接して居られる先生の存在の何と大きく輝いていることか……。

「日本に帰られたら、翌日からまたお仕事お忙しくて大変ですね」と云った別れぎわの私の言葉に先生は、

「私は使命感を持っていますから大丈夫です」ときっぱり言い切られた。

どういわけか帰国してから青い空が目につく度に、その時の彼女の涼やかな笑顔がそこに浮かぶのである。

(高井 敬子)

編集部から

ご投稿ありがとうございます。いずれも、表記上の訂正のほかは、原文のまま掲載いたしました。

これからも、皆様の卒直な「声」をお寄せください。支部活動や「ともしび」へのご意見、ご感想、日常の雑感などを四百字程度で、お待ちしております。

送り先・川崎市葛飾区土橋三十一

松本佳子 (☎〇四四一八五

二一六四五)

・'99年東京支部総会のお知らせ

・四月二十四日(土) 一時

・国立教育会館(虎ノ門)

・記念講演 坂本春生氏

(西武デパート副社長)

演題は未定ですが「女性のエンパワ

ーメント」について話していただく予定です。会員でない方もお誘いください(無料)。詳細は追ってご案内します。

留学生相談室から

福島みち子

謹んで新春のご祝詞を述べさせていただきます。私たちが「留学生相談室」を開室したのは一九八六年七月ですが、一年後の一九八七年に、貴会から最初のご寄付をいただきました。その後十余年間、毎年変わることなくご支援をいただいておりますこと、お礼の申し上げようもない気持ちで一杯でございます。

経済的裏付けゼロの私たちが無謀にも相談室を開いたのは、日本政府の留学生受入れ十万人計画構想にも拘らず、現実の受入れ態勢のあまりの貧弱さに、止むに止まれずでございます。満十二年余を経た現在、遅々とした歩みながらも、留学生受入れに関わる諸事情に改善が見られ、私たちのグループも、ボランティア一同が歳月を重ねたこと以外は無事に活動を継続し、毎年平均五千件前後の相談を受け付けております。

時の流れで開室当初とは相談内容も変化しておりますが、日本で学ぶことを選んで来日した若者たちが、少しでも実りある留学生生活を送れるよう微力を尽くす所存でございます。

「新春のつどい」(99・1・9)

一九九九年「新春のつどい」は、

国内奨学金贈呈式(本部と東京支部の共催)を中心として、新宿京王プラザホテルで、開催されました。

国内奨学金の受賞者は、応募者多数の中から選ばれた、大学院生九名、学部生五名、ホームズ奨学生一名、



社会福祉奨学生四名の、合計十九名の方々でした。このうちの一名分が東京支部の負担によるものです。

村岡国内奨学委員長と玉井社会福祉委員長から、それぞれ詳しい選考経過の報告があり、山本会長より奨学金が贈呈されました。

八十四才の高野フミさんの元気な乾杯の音頭ではじまった会食もなかなか中に、各奨学生によるスピーチが続きました。それらははじけるような若いエネルギーと希望に満ちて感動的でした。中でも、視覚障害にもめげず、失語症老人の手助けをしたという福田さんと、脊髄損傷で車椅子の生活ながら、ソシアルワーカーをめざす諸田さんの積極的な生き方には、心うたれました。

協会の本部や支部の催しの一つ一つに参加、協力することが、将来の秀れた女性リーダーの育成に、微力ながらも寄与することになることを実感させられました。

財務委員会の絶大なるご協力による福引を大いに楽しみ、加藤副会長と、高井東京支部長の挨拶で、本年のより充実した活動を誓い合いました。

(三浦由紀子)

事業報告・予定

7・8 バスツアー(財務主催)

成田・歴博・川村美術館

9・9 見学「気象と試験機器」

スガウエザリング研究所

9・19 JAUWセミナー

テーマ「女性のエンパワ

ーメント」

10・28 講演「伝承医学からみた健

康法」小橋規實男氏

11・16 バスツアー(財務主催)

筑波農林研究団地見学

12・9 講演「教科書にみる日本の

平和教育」

講師 田中正子氏

1・9 新春のつどい(本部主催)

国内奨学金贈呈式(国内奨

学・社会福祉両委員会と

東京支部の共催)

2・28 国外奨学生を囲む会(国外

奨学委との共催)

3・1 “ともしび”第25号発行

3・10 講演「ワインのワインでな

い話」

講師 本間千枝子氏

4・24 東京支部総会

記念講演 坂本春生氏

7・1 “ともしび”第26号発行

東京支部新入会員

(1998年12月現在)

氏名	出身校	住 所
伊藤 公子	日大	女
藤山 公子	日大	女
奥山 公子	日大	女
加藤 百子	東大	女
河井 尚美	東大	女
河村 紀子	東大	女
酒井 幸恵	東大	女
武井 子子	東大	女
竹内 子子	東大	女
平石 子子	東大	女
福田 子子	東大	女
藤田 子子	東大	女
松浦 子子	東大	女
柳下 子子	東大	女

謹 弔

梅村 茂子 実	'98年3月
草島三輝子 日女	'98年5月18日
山川 正子 茶	'98年7月17日
藤枝 恵子 奈女	'98年8月20日
田中 照子 筑波	'98年11月7日
田中 セツ シカゴ	'98年11月21日
田中 実	'98年11月21日

◇ご寄付いただきました。お礼を申し上げます。

青木満里子氏	一万円
熊切 富子氏	一万円
田中 正子氏	一万五千元
若林 蓉子氏	一万円
東京漫步くらぶ	一万円
英語講座	五千元
楽しい俳句会	三万円
源氏物語を読む会	五万円
フラワーアレンジメント	一万八千元

◇寄付しました。

留学生相談室	三万円
国内奨学金	十万円

◇寄贈図書紹介

『源氏物語ひとりごと』

坂上栄美子著(新風舎)

寄贈者 坂上栄美子氏

◇お願い

使用済みのカード類、切手などを
お送りください。年末にまとめて、
中野盲人自立センターに届けていま
す。

◇訂正(第24号)

四頁の「事業報告・予定」のJAUW
セミナーの場所 戸塚日生ビル
↓第一生命東戸塚教育センター

三頁の「オーストリア紹介」ドイ
ツ国家↓ドイツ国歌 お詫びして訂
正いたします。

編集後記



耳たぶの冷たさを感じたこの二月。
ロングコートも伊達ではなくなり、
久しく忘れていた冬を実感した。イ
ンフルエンザが猛威をふるったが、
皆様、お元気ですか。

とはいえ、陽ざしもやわらかくな
り、見上げる空は春霞。庭先に梅が
香り、桃の節句を迎え、間もなく桜
の便りも届く。爛漫の春三月。世紀
末の暗い世相をよそに、自然は確か
な息吹きを伝えてくれる。薔薇の木
に薔薇の花さく。何ごとの不思議な
けれど。うろ覚えの白秋の詩の一節。
ささやかな感動を大切にしたい。原
稿を書いてくださった皆様、ありが
とうございました。

ともしび 二五号 発行日 一九九九年三月一日

発行 社団法人大学婦人協会東京支部 ともしび編集係

〒160-0017 新宿区左門町十一番六〇一

Tel 〇三三三三八八二 印刷 タナカ印刷
Fax 〇三三三三八八二